

## 『英語（リスニング）』

## 第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

## 1 前 文

令和7年度共通テストの「英語（リスニング）」の受験者は、本試験が451,864人（昨年度は447,519人）で、受験者全体の約97.91%（昨年度は約98.10%）に当たる。このことは、本テストの実施そのものや、問題の質や難易度、使用される言語材料等が、受験者のみならず、全国の高等学校関係者及び英語教育関係者等、多方面に与える影響が非常に大きいことを意味している。満点は「英語（リーディング）」と同じ100点であり、平均点は61.31点（昨年度は67.24点）であった。

なお、評価に当たっては、21ページに記載の8つの観点により、総合的に検討を行った。

## 2 内容・範囲

内容・範囲に関しては、「英語コミュニケーションⅠ」「英語コミュニケーションⅡ」「論理・表現Ⅰ」を網羅している。題材は受験者にとって身近な話題から社会的な問題まで幅広く、絵や図表を見て答える問題、講義を聞いて内容をまとめる問題、二者や三者による会話を聞いて内容を把握し、知識を活用したり思考力を発揮したりして答える問題等で構成されていた。

第1問A 短い発話を聞いて、内容に合う英文を選ぶ問題。天候条件に触れながら車の送迎を頼む、宿題終了後に泳ぎに出かけることを提案する、券売機で小銭が利用できないため小銭を借りる、行き先未定の校外研修の行き先についての希望を述べる等、自然なコミュニケーション場面である。問3は、紙幣を受け付けない券売機という設定にやや不自然さがある。

第1問B 短い発話を聞いて、内容に合う絵を選ぶ問題。腕時計の色と形の特徴、複数人の防寒具着用状況、犬に引っ張られ助けが必要と思われる子供の様子、予想外の釣果であった釣り人の様子が描写されている。

第2問 日本語で示されている場面設定に基づき、短い対話を聞いて、適切なものを選ぶ問題。スマートフォン画面のアプリ配置を説明する、買うべき洗剤を容器の形とデザイン・値段から絞り込む、条件を基に目的地に向かうルートを決定する等の場面が描写されている。問11については、単純な路上での道案内ではなく、条件をすり合わせながらルートを選ぶという、より受験者が遭遇しやすい場面設定であった。また、複数の条件を正確に聞き取るという問いたい力に沿い、簡略化されたルート図を示すという工夫があった。

第3問 短い対話を聞いて、示されている質問に合致する内容を選ぶ問題。博物館への入館方法を示す、目的の教室の場所を確認する、条件を踏まえて移動手段を選ぶ、練習日程を相談する、子供時代に集めていた物について話す、一度紛失した財布についての心配事を伝える等、コミュニケーションの必然性が十分意識された場面設定である。問15は、練習日程を相談するというコミュニケーションの主題から外れたものが問われており、やや不自然である。

第4問A グラフや表を描写する英文を聞いて、図表中に欠けている情報を補う問題。問18～21は朝食の好みの調査結果に基づき、各折れ線グラフに示される増減の様子を表す多様な表現を聞き取ることが求められる。問22～25は、1週間の天気予報の表を完成させるために、曜日の順番どおりに展開する発話を正確に聞き取ることが求められる。

第4問B ビーチの特徴を説明する四人の発話を聞き、3つの条件全てを満たすものを選ぶ問題。表にあるビーチの順で、サーファーの数、波の高さ、海岸清掃活動の有無という条件が発話され

る。自分の基準で条件を設定してそれに合うものを選び取るという、日常生活や社会生活において経験する場面の設定である。

第5問 講義を基に3つの活動に取り組むという、学習の過程が意識されている問題。活動1では、贈られた物を別の人への贈物とする贈答文化 (Regifting) の関係者の感情の特徴を聞き分け、習慣を広める手段をワークシートにまとめる。活動2では、講義に関する二人の受講者の短い発話が見ながらディスカッションを聞き、情報を統合しながら判断する。問32では、判断対象となる英文が問題用紙に書かれておらず、聞き取って正誤を判断するという新しい問われ方であった。

第6問A 二者が自分の食事のスピードやかむ回数について話す英文を聞き、それぞれの主張の要点を選ぶ問題。会話の中で、より望ましい食事の仕方についての合意がなされ、話者の一人の行動の変容が想起されている。

### 3 分量・程度

出題は例年どおりで、大問が6問、設問が37問の問題構成である。読み上げ回数も変更はなく、第1～2問が2回、第3～6問が1回であった。多様な英語が使用されていたが、音声・スピード共に、聞き取りやすかった。

第1問A (各英文9語～20語・2回読み) 1～2文の短い英文を聞き、概要を正しく把握して最も適切な選択肢(文)を選ぶ問題。音声は聞き取りやすく全体的に解きやすい問題だった。問題配列もほぼ易から難へと配列されており取り組みやすい。

第1問B (各英文11語～19語・2回読み) 2文の英文を聞き、その英文が表している選択肢(絵)を選ぶ問題。4種類の絵の差が工夫されていて短時間でも識別しやすい。音声は聞き取りやすく、若干表現に難しいものがあったとしても文脈から判断でき、全体を通して難易度が調整されておりバランスが良い。

第2問 (各対話文26語～32語・各設問5語～6語・2回読み) 4問から3問へ出題数に変更があった。場面設定は受験者にとって想像しやすく、はっきり、ゆっくりと発話されており、話の内容を正確に追っていけばどの受験者にとっても取り組みやすい問題である。どの問いも正答率が高く、問10の正答率は9割を超えている。

第3問 (各対話文46語～53語・1回読み) 発音の特徴の異なる英語が話されているが聞き取りやすい。若干難しい表現があったとしても文脈から判断できる程度であり、難易度は標準。全体を通して様々な難易度の問題がバランス良く配置されている。

第4問A (問18～21=83語・問22～25=83語・1回読み) 全体を通して音声ははっきりと聞き取りやすい。問18～21は文脈を正確に追っていけば正答を選ぶような標準的な難易度ではあるが、グラフの傾向を正確に把握する必要があり、識別力がある問題である。問22～25は全体的に正答率も高く、解きやすい問題だった。

第4問B (四人の各話者=41語～48語・1回読み) 発音の特徴の異なる英語が、適度な速度で話されていて聞き取りやすい。解答時間は長くはないが、出てくる情報を順番に整理、確認していけば正解を導き出すことは難しくない。正答率も8割を超えていた。

第5問 (問27～31=278語・問32=21語・問33=68語・1回読み) 音声は聞き取りやすく、スピードも標準的で話の内容は理解できるが全体的に正答率の低い難問である。問28～31はワークシートと選択肢にある言い換えの語彙の理解がとっさには難しく、正答率は1割程度であった。問32は10語程度×2文の短い英文と講義内容の一致を聞き分ける新出の問題で、音声は短く聞き取りやすく難易度は標準的だった。問33の選択肢は2行にわたって比較的長い20語程度の英文で構成さ

れ、かつ限られた時間で講義と会話とグラフを統合して判断することが求められるなど、受験者への負荷はやや高かった。

第6問A（対話文全体＝171語・1回読み）二人の対話ははっきりと聞き取りやすいテンポで話されており、話題も想像しやすく比較的易しい問題である。

第6問B（英文全体＝209語・1回読み）登場人物が四人から三人になり発話は聞き分けがしやすくなった。それぞれの主張も明確で標準的な難易度である。問37は正答以外の図表が本文との関連がなかったこともあり、主張と図を結び付けることは比較的易しく7割を超える正答率だった。

#### 4 表現・形式

第1問A 短いモノローグに合う英文を選ぶ設問形式。それぞれの問いの状況を的確に把握し、4つの選択肢から適切なものを導き出す力が求められている。各問いとも問題文と選択肢で適切な言い換えがされている。また、短い英文の中で場面を想定させる工夫が散りばめられている。

第1問B 短いモノローグに合う絵を選ぶ設問形式。英語を正確に聞き取り、適切な絵を選ぶ必要がある。問7は、being pulled byを理解して絵を選ぶことが難しかった受験者がいたことが予想される。問8は、文脈から因果関係を正確に把握し、適切な絵を選ぶ必要があり、思考力が問われる良問である。

第2問 短いダイアログに合うものを選ぶ設問形式。どの設問も身の回りにある物が題材として取り上げられていたり、実生活に基づく場面が設定されていたりするなど自然な対話となるよう工夫されている。最も適切なものを選ぶ上で、単純に聞き取った情報を基に答える問いだけでなく、より深い思考力を測る問いがあると良い。

第3問 短いダイアログを聞き、問いに答える形式。問いと状況は事前に与えられている。多様な話者による英語が使用され、コミュニケーションの場面もバリエーションに富んでいる。

第4問A 話の内容に沿って情報を整理し、グラフや表を完成する形式。問18～21は、動詞や副詞の意味を正確に理解し、朝食の好みの変化をしっかりと把握する必要がある。目盛りや数値が表示されていないグラフを使用することで、その増減を意識しやすくなるよう工夫がされている。

第4問B 四人の説明を聞き、条件に合うものを選ぶ形式。自分の条件に当てはまるものを選ぶという、実生活の中で必要とされる状況がうまく再現されている。また、条件を整理するための表が用意されるなど受験者への配慮も見られる。話される英語はおおむね条件の順番に沿っているため、聞き取りやすいが、今後、話される条件の順番を変える等の工夫があっても良い。

第5問 問27～問31は、講義を聞き、ワークシートに要点をまとめ、講義の内容に一致するものを選ぶ形式である。ワークシートはデザインや配列等が工夫されており、内容の理解を助けているだけでなく、授業づくりの参考になるものである。問32は、メンバーの発言が講義の内容と一致するかを判定する形式で、メモを取る表があったことが受験者への配慮につながった。問33はグラフを見て、会話と講義の内容から適切なものを選ぶ形式である。

第6問A 二人の対話を聞き取り、対話中で話者が述べた意見を選ぶ問題と、対話の終わりに話者の一人が決心したことを問う問題。話の展開も把握しやすく、by the end ofを問いに示すことで、聞き取る際に注目すべきポイントが明確になるよう工夫されている。問35は、発話中の単語をそれぞれの選択肢の中に入れ込むなど、巧みに選択肢が作られていた。

第6問B 三人の会話を聞き取り、要点をつかんだり、考えの根拠となる図表を選択したりする問題。話者が三人になったことで、名前呼びかけるといった、話者を識別するために必要であった表現が減り、より内容に集中できるようになった。問37は図表にバラエティがあり、高校現場での探究学習指導へのヒントにもなる出題である。

## 5 ま と め（総括的な評価）

本テストは、実際のコミュニケーション場面に即した文脈の中で、日常的な話題や社会的な話題など、様々な題材から構成された内容であった。各大問を見ると、絵や図の描写、日常生活でのやり取り、大学での講義とテーマに関するディスカッションなど多様なコミュニケーション場面で展開される発話内容が設定されている。音声面では、アメリカ英語やイギリス英語に加え、英語を母語としない話者の発話も含まれている。多様な価値観や文化的背景を持つ国・地域の人々と対話することが想定されるグローバル社会を見据えたリスニング試験であると言える。また、問題の特徴としては、必要な情報を聞き取って答える知識・技能を問う問題に加え、まとまりのある内容の話の聞き取って、概要や要点を捉えるなど、思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる内容がバランス良く出題されている。

さて、今年度は、平成30年告示の学習指導要領に基づく教育課程の下で実施される初めての試験である。学習指導要領では、コミュニケーションを図る資質・能力を育成するため、言語活動の充実や4技能5領域をバランス良く育成することなどが目標として示されているが、本テストではこうした趣旨を踏まえて各問題が作成されていることに注目したい。会話の目的や場面、状況などを踏まえながら発話内容の情報を手掛かりに話者の真意について気付きを得ながら対話を行う、実際のコミュニケーションの文脈が十分に意識された発話と設問の工夫が、各大問で見られた。

また、学習指導要領で重要視されている、教科横断的な視点に立った指導や協働的な学びという視点が反映された問題も多く設定されている。例えば第5問では、講義で話される情報を整理しながら聞き取り、ワークシートを完成する問題や、講義を受講した学生が内容を確認し合う問題、講義の内容から気付きを得て、より発展的な話合いにつなげていくという、段階的な学習活動の要素を取り入れた問題が出題された。講義の内容とグラフデータなど複数の資料を関連付けながら、その意味するところを考察する問題もあり、総合的にものごとを捉える力が要求されていた。

本テストの問題内容を踏まえると、高等学校等における今後の英語指導は、思考力・判断力・表現力等の向上を目指した授業改善を推進することが一層期待される。日頃の授業においては、英語で発話された情報を聞き取り、単に理解するだけではなく、発話の目的・場面・状況などを踏まえて話の大意を把握する学習や、社会的な話題について自ら調べたことをグラフなどのデータを活用しながら発表したりする学習を、積極的に行うことが必要になるだろう。読んだり、聞いたりしたことを基に自らの考えを述べたり、互いに意見を伝え合ったりするような豊かなコミュニケーション活動を通じ、主体的・対話的で深い学びを実現する指導を充実させたい。

次年度以降も現在のような問題作成方針に基づいた内容が望ましいと考える一方で、幾つかの課題も見られた。問題の中には、発話内容を正確に聞き取れても、内容の構造や情報整理が比較的複雑なものや、選択問題の言い換えの語彙が受験者一般になじみがないと思われ難いものがあった。この点については、難易度のばらつきとの整合性を図りつつ、注意深い検討を望むものである。

グローバル化の進展やAI技術の発展に伴い、情報社会が大きく変化する中で、受験者が日々の生活で触れる情報の量や質は変化している。多様なものの見方・考え方や論理的・客観的に分析し、ものごとの本質を見極める力は今後一層必要になるだろう。こうした社会の変化を踏まえ、本テストにおいては、受験者が身に付けた知識を結集させながら解答する問題や学習過程を意識した問題が多く出題されるなど、外国語の学び方や指導の仕方にメッセージを与える試験であった。今後も、社会や大学で求められる力に対応すべく問題の在り方を研究されることに期待したい。